

N I P P O N
S T E E L
M O N T H L Y

2005
MARCH
VOL.146

3



環境特集

「美しい惑星、皆の地球を守るために」

新日本製鉄

「美しい惑星、皆の地球を守るために」

新日本製鉄(株) 代表取締役副社長

平尾 隆

地球全体の長期的課題として取り組む

今年2月16日に京都議定書が発効しました。新日鉄は「地球温暖化問題」にどのように取り組んでいくのでしょうか。

地球温暖化問題が提起しているのは、美しい惑星である地球において豊かな生活を維持していくためには、地球人全てが守るべき“節度”があるということです。

そもそも資源・エネルギーの大半を海外に依存している日本は、地球温暖化問題がクローズアップされる以前から、省資源・省エネルギーに取り組んできました。自然災害という脅威もありますが、水と緑がこれほど豊かで、身近な国土は他に類がありません。

そうした自然を維持しながら経済的にも発展した成功例を、発展途上国を含めた地球全体に広げていくことが、先進国日本の役割です。

地球温暖化問題は、現時点で全てを解決できる課題では

なく、長期的に取り組むべきテーマです。また、海や河川の汚染、特定地域の大气汚染とは違い、上空の大气でつながっている地球全体の問題であるため、局地的対応ではいけません。この課題の解決には、あくまでも人間の豊かさを前提に経済と環境を両立させることが大切です。明るく前向きな気持ちで取り組んでいくべきだと考えています。

京都議定書については、具体的な取り組みは一部の国にとどまっているため、大きな効果は期待できません。今後、米国や中国をはじめ広く参加を呼びかけ、地球全体で取り組む仕組み作りが必要です。京都議定書を批准している日本にとっては、国際的に約束したことを確実に実行し、仕組み作りのイニシアティブを取っていくことが命題です。

現在、京都議定書に対しては賛否両論ありますが、国際的に約束した目標ですから、達成しなければ長期的展望を踏まえたイニシアティブは取れません。産業界としては「自主行動計画」を達成し、約束したことを実行する心構えで臨んでいきます。そして日本が世界に率先してきちん



新日本製鉄(株) 代表取締役副社長 平尾 隆



国内最大規模の「水素ステーション」建設 (愛・地球博)



「液体水素製造技術開発」実証設備(君津)



電磁鋼板



響灘・風力発電

地球温暖化対策の推進

省エネルギー技術開発による自主行動計画の推進
CO₂削減プロジェクトを通じた国際貢献

循環型社会構築への参画

社内ゼロエミッションの推進
社会や他産業で発生する副産物の再資源化

新日鉄

中期環境経営計画

2003 - 2005年度

環境リスクマネジメントの推進

環境負荷低減対策の一層の推進
グローバルスタンダード化する新たな環境規制への対応

環境リレーションズの展開

関係会社と連携した環境活動
地域社会やお客様等との開かれた環境コミュニケーション

環境・エネルギーソリューションの提供

LCAの観点も踏まえたエコプロダクツの開発
技術、インフラを活用したリサイクル・環境ソリューションの提供
新エネルギーの技術開発・導入

と目標を達成したことを、一つの外交カードとしていくべきではないでしょうか。

日本が世界に貢献できる仕組みとしては、「京都メカニズム」があります。その中でも発展途上国向けの「CDM」(1)のメカニズムは非常に優れた仕組みです。今後、技術立国・日本が積極的にこの仕組みを使い、発展途上国の経済発展と環境対策が高い技術水準で実施されるように支援していくことが最良の道だと考えています。

長期的技術開発としては、水素社会の実現に向けた「水

素製造技術」やCO₂を地中等に封じ込める「CO₂分離・貯留技術」などが有望です。現在、日本では「水素・燃料電池実証プロジェクト(経済産業省)」が進められていますが、当社では、すでに君津製鉄所が関東圏での水素供給実験を開始しており、今後、「愛・地球博」が開催される愛知県でも名古屋製鉄所からの供給を開始します(環境報告書参照)。また風力・太陽光などのクリーンエネルギー、天然ガス液体燃料化、バイオマスのガス化など新たな技術開発に対しても、鉄鋼業は貢献できる懐の深さを持っています。

視野を広げ、真に効果のある方策を

地球温暖化防止に向けて、日本では産業、民生、運輸の各部門がそれぞれどのように取り組むべきですか。

取り組みの基本的な考え方は、技術的裏付けがある対策を講じるということです。産業部門については産業界で着実に推進し、実績をあげている「自主行動計画」の対象事業所を拡大し、裾野を広げていくことが今後の課題となります。

一方、民生・運輸はあまり進んでいません。この分野でも節約・我慢だけでなく産業界が開発を進めている有力な技術を最大限に活用して、豊かさを維持しながらCO₂削減を達成し、明るい展開にしなければ長続きしません。

民生部門では、ライフスタイルや業務スタイルの変革も大切です。私は“便利”を習慣化してはいけないと思います。メリハリのきいた生活が大切です。私たちの事業所でも、不必要な電気を使わないなどの業務スタイルを作ることが大切ですし、国全体では揚水発電や夜間操業などによって電力使用量を平準化していくことも重要です。

運輸部門では、自動車の軽量化が進み、ハイブリッドカーも普及し始めています。しかし東京では高速道路が渋滞し、燃費が悪くなり、その効果も発揮しづらいため、今後は、道路行政の改革やモーダルシフトまでも視野に入れ社会システムそのものを変えていく必要があります。

鉄鋼業は構内輸送や製品輸送が不可欠な“運輸業”でもあります。構内の輸送効率だけでなく、構外輸送でのモー

CDM (Clean Development Mechanism) : クリーン開発メカニズム。発展途上国内で行われる温室効果ガス削減プロジェクトに対して、先進国が技術や資金などの援助を行い、その結果生じた削減量が先進国の削減分としてカウント(クレジットが発行)される制度。

ダルシフトにも取り組んでいく必要があります。当社ではITを駆使したり、海上輸送を活用して、製品輸送のモーダルシフトも実施しています。

いずれにしても大事なことは子供のときからの教育で、やはり「物を大切にする」といった意識を浸透させる初等教育が重要です。

各製鉄所では子供たちの見学を受け入れたり、八幡や室蘭で日本古来の「たたら製鉄」の再現を通じた「人を育て、モノづくりを大切にする教育」を行っています。今後もモノづくりの面白さや大切さを肌で感じ、モノづくりの感動やでき上がった製品の大切さを実感してもらえる機会を提供していきたいと思ひます。

新日鉄では現在、「環境税」の導入に反対し、引き続き自主行動計画を推進していくこととしています。

地球温暖化対策の目的は、経済と環境を両立させながらCO₂の発生を抑制することです。“税”はその一つの手段であり、決して目的ではありません。問題は、効果や使途が不明確なまま課税を実行しようとしている点です。

今の議論は、漠然とした期待だけで動いているような気がします。現在提示されている効果は、「AIM」という経済予測モデルを基にしていますが、当然ながらそのシミュレーションは前提条件によって大きく変わります。

例えば、省エネ型電気機器の普及率の予測が成り立つために、どの程度の補助金が必要で、既存の税との関係で環境税が不可欠なのかどうかといった定量的議論が十分できていません。

残念ながら「環境税」の提案は、“環境”という美名を冠して、まず税収を増やすということではしかありません。一方で、削減効果だけを考えると、CDMのように発展途上国に資金を出して改善した方がはるかに効率良く高い効果が得られます。しかも日本の先進技術を途上国に移転するので、地球全体としての意義が大きいのです。

「環境税」の実質の問題は2つあります。1つは、CO₂削減のために最も大切な技術開発の主体の力を削ぐことです。日本の省エネルギー技術水準は現在最高レベルにあり、さらなる開発には相当な労力や費用が必要ですが、徴税でそれができにくくなります。

2つ目は、加工貿易で成り立っている日本経済を支える基盤産業の国際競争力が落ちると、地球温暖化対策コストをかけないために製品コストが安く、CO₂発生原単位の大きい国に生産拠点が移転してしまう点です。実際に中国での鉄鋼製造では、日本の約1.5倍のCO₂が発生しています。

そもそも地球温暖化問題は、技術がなければ解決しません。税を払って競争力が落ち、稼働率が下がり、一層非効率な生産になる。その結果、開発力が削がれてさらに競争力が落ちるという負のサイクルを生むこととなります。



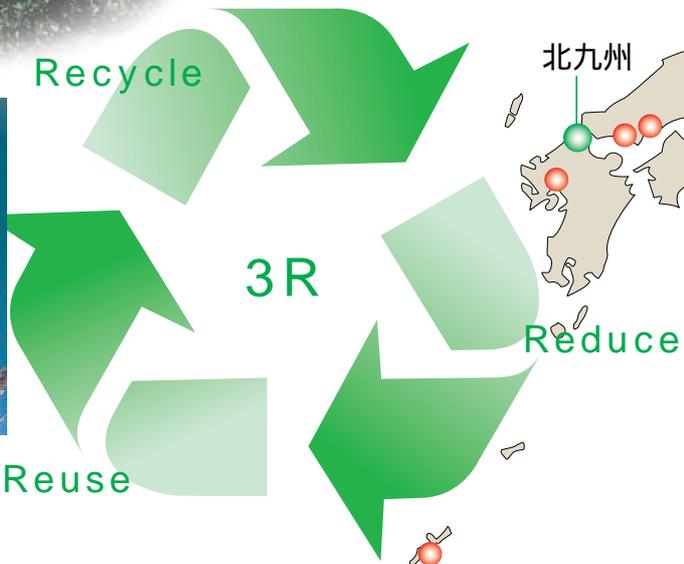
廃棄物ガス化システム開発・実証



ひょうごエコタウン タイヤガス化工場



北九州エコタウン事業



資源循環型社会の大きな受け皿として

「資源循環型社会の構築」に関する基本的な考え方はどのようなものでしょうか。

日本は資源を海外から輸入し、それを加工して外貨を稼いでいますから、3R (Reduce、Reuse、Recycle) が基本の国で、海外から手に入れた資源を徹底的に使いこなし、有効利用していくことが必須です。鉄鋼業は、輸入した資源を素材にして社会に還流させる最上流に位置しているのです。資源をギリギリまで使い尽くす“模範生”である必要があります。

さらに鉄鋼製品の製造工程だけではなく、社会に出ていった製品の後始末を含めてその役割を自覚しなくてはなりませんので、資源循環の蓋をきちんと閉めるための幅広い技術開発に取り組んでいきます。日常製鉄所で行っている歩留向上活動も、資源の有効利用という面で重要な取り組みです。

資源循環型社会を形成するためには地域との連携も不可欠です。八幡、広畑等の製鉄所はエコタウン事業へ参画し、資源循環型社会の大きな受け皿として重要な役割を果たしています。当社は北から南まで全国に製鉄所が立地し、各地で連携を取っています。例えば、全国18カ所のリサイク

ルポートのうち、5つが当社の港湾設備です。

循環型社会の基本は3Rです。当社は、これを観念論だけではなくLCAの手法を使い、廃棄物利用も含めて有効な製品（素材）をいかに作り、最終的にどのように再資源化すべきかを追求しています。

資源循環型社会の構築に関する取り組み状況と、今後の課題についてお聞かせください。

2001年に「循環型社会形成推進基本法」が施行されました。同基本法は、海に囲まれ閉ざされた国で「資源を循環させる社会」を目指す、日本独自の素晴らしい法律です。本年1月に「自動車リサイクル法」が施行され個別物品に関する法律が全て揃いました(2)。

当社グループでは、今年4月からは八幡地区においてエコナジー社が、来年からは名古屋製鉄所にて、同法で定義された「ASR (シュレッダーダスト) 再資源化」を開始します。また、廃自動車の全部資源化事業につきましては、同法施行以前から八幡地区で実施していましたが、今年からは君津でも開始されます。

当社では、従来よりスラグ、ダストなどの副産物を再資



かまいしエコタウンプラン



環境学習「人を育て、モノづくりを大切にする教育」たたら製鉄(p6~8参照)

源化しており、そのリサイクル率は98%にも達しています。高炉セメントの原料となるスラグは、セメント製造時の焼成工程を省略できることから、CO₂削減にも寄与しています。今後はさらなるゼロエミッションを目指し、再利用が難しい金属以外のスラジ（残渣）の処理技術開発を進めていきます。

昨年、経済産業大臣賞を受賞した広畑製鉄所での「廃タイヤのガス化リサイクル設備」の立ち上げにより、冷鉄源溶解炉（SMP）とあわせて、現在国内で発生する廃タイヤの約12%をリサイクルする体制が整備されました。タイヤゴムに含まれるカーボン分は、ガスや油として、スチールコードは鉄源として、ほぼ100%活用されるため、非常に優れた技術だと自負しています。

また当社は、「廃プラスチックの資源化」でも、全国処理量の約3割に当たる22万トンの再生利用体制を確立し、社会システムの一翼を担っているところです。

さらに、社会問題として大きく取り上げられたPCB処理につきましては、北九州エコタウンでスタートし、室蘭での設備建設も決定しています。

いずれにせよ、資源循環型社会構築のためのプロジェクトへの参画は、社会の仕組みにビルドインされるということですから、途中で放り出すことは許されません。従って、引き続き地に足のついた取り組みを進めていくつもりです。

今後に向けて、製鉄プロセスが持つポテンシャルについてお聞かせください。

鉄鋼業は、製造プロセスで取り扱う圧力、温度の領域が幅広く、固体・液体・気体という物質の全形態をカバーしていることから、資源循環型社会の構築に向けて、非常に大きなポテンシャルを持つ産業と言えます。

社内に集積した幅広い技術や、社外との接点の大きさという鉄鋼業の特徴を活かし、ガス化溶解炉によるゴミ処理発電など、社会に役立つソリューションを提案していただくだけではなく、他産業との連携を進めており、例えば半導体洗浄に使った廃酸、製紙業のスラジ、アルミ精錬の廃材を再利用するなど、さまざまな形で廃棄物の受け皿となっています。

“環境を大切にする思い”を込めたモノづくりを

「環境リスクマネジメント」に関し、当社・グループの課題は何でしょうか。

環境リスクに関しては、対象物等も増えて基準も厳しくなっていますが、取扱物質の種類と量を把握し適正な管理基準を設定して、それを確実に守る地道な取り組みの繰り返し環境リスクマネジメントの基本です。当社は環境負荷の低い製品を世の中に送り出す立場として、お客様、社会から信頼される取り組みを徹底していきます。

「マニフェスト(産業廃棄物管理票)」も注意しておかねばなりません。マニフェストは、産業廃棄物とともに処理業者に手渡され、きちんと最終処分されて初めてループが完

成します。全ての仕事に通じることですが、最後まで自分の責任だという意識、緊張感を維持しなければなりません。

防災の面では応急処置とともに本質的な対策を講じることが基本です。名古屋ガスホルダーの新設に際しては、「HAZOP」(3)の手法を活用して根本的対策を築きました。当社では環境対策だけではなく、ISO14001に準拠した防災マネジメントシステムを構築しようとしていますが、今後もより本質的側面から議論して地道に取り組んでいきます。

以上を総括して、最後にメッセージをお願いします。

当社は社会の大きな資源循環の中で事業を展開しています。社会が健全になることは当社の喜びでもあります。環境対策の基本は“後追い”ではなく“先取り”です。環境に優しい製品を開発し市場に出す動脈産業としての役割に加え、静脈流での受け皿として社会に役立つ方法を常に能動的に発信し続けていきたいと思えます。

また当社では、約30年前から製鉄所で植林を行い「郷土の森」づくりを進めてきました。木々は人間の気持ちを落ち着かせます。自然に根ざした製鉄所は素晴らしいと思えます。こうした地道な取り組みは大切だと思っています。

私は、環境に目を配ることができる企業は必ず良い製品をお客様に提供できると確信しています。今後も、“環境を大切にする思い”を込めた製品開発、モノづくりに邁進するとともに、環境に対するソリューションを提供しながら、お客様から信頼される事業を展開していきます。



HAZOP (Hazard and Operability Analysis) : プラントの安全性を評価する手法の一つで、設計段階において、火災・爆発など事故や災害につながる要素を網羅的に想定し、評価・対応する手法。1992年米国・労働安全健康法で危険物を扱う施設の評価手法として認定された。

地域でモノづくりと環境を考える 八幡「東田たたらProject」に 小学生が参加

2005年1月17日、八幡の東田第一高炉史跡広場で、日本の古代製鉄法“たたら製鉄”の体験授業の実験操業が行われた。3年前から人材育成を目的に実施してきた「たたら製鉄」を発展させたもので、2004年度の今回は、社員が出張授業を行ってきた北九州市立中原小学校の児童の皆さんも参加し、高校生、大学生、北九州市の方々との輪が広がった。製鉄所がスチール缶リサイクル活動をきっかけに長年継続してきた環境教育が、地域活性化への新たな取り組みへと進化した事例だ。

製鉄所を学びの場に、子供たちと交流

八幡製鉄所では、子供たちに鉄の持つ素晴らしさとリサイクルの重要性を理解してもらうため、地元の小学校に社員が赴き「出張授業」を行ってきた。まず子供たちにとって身近なスチール缶のリサイクルから始まり、地球環境と鉄との関係や鉄づくりをテーマに、各担任の先生や児童の皆さんの要望を踏まえてカリキュラムが組まれてきた。

今回のたたら体験授業に参加した北九州市立中原小学校の5年生の場合、社会科学習として「わたしたちのくらしと工業生産 世界一の鉄づくり・八幡製鉄所のひみつをさぐれ!」をテーマに、2004年9月から3カ月間、授業だけではなく製鉄所見学や幅広い交流を図りながら学習を進めてきた。

「ゲストティーチャー」として子供たちに接してきた生産業務部生産工程企画グループマネジャーの河野捷紀は次のように語る。

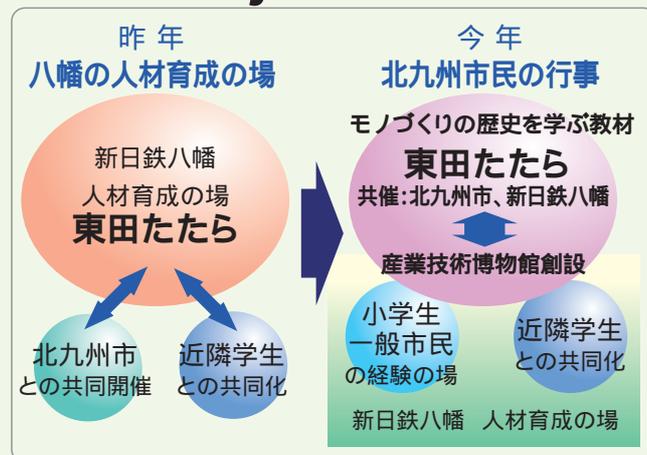
「皆さんは好奇心を持って、真剣に勉強し、リサイクルの大切さはもちろん、モノづくりの素晴らしさ、そしてさらには働く人の製品に対する思いまで理解してくれるようになりました。授業で『たたら製鉄』に触れたとき、子供たちが大変興味を持ってくれたので、ぜひたたらを体験してみませんか」と担任の高松先生に申し入れました」

そしてモノづくりを体験する総合学習の一環として、今回初めて小学生がたたら製鉄を体験することになった。

企業の人材育成を地域の人材育成につなげる

当初「東田たたらProject」は、「モノづくりの精神」を培うための若手社員教育の一環だった。

「古代の製鉄技術の中には近代製鉄の技術を持つ私たちには分からない部分も多く、若い社員が試行錯誤しながら探究心を醸成することが目的でした」と、常務取締役・八幡製鉄所長の



古野英樹は語る。

きっかけは、2001年に当時の製鉄所長たちが島根県出雲地方で行われている日刀保たたら（(財)日本美術刀剣保存協会）を見学したことだった。

「製鉄所の現場は大変忙しく、人材育成の場としての土壌が薄れていく危機感があり、たたら操業をプログラムに組み入れました。さらに、地域から製鉄所は堀の中にあるイメージがありました。その壁を取り払うことで私たちのモノづくりのマインドを広く市民の方々にも伝えていけると思いました」と、当時の状況を詳しく知る北九州環境プラントサービス㈱代表取締役社長の櫻木準一（元八幡製鉄所製鉄部製鉄技術グループリーダー）は振り返る。

第1回目は若手社員と協力会社チームで実施。第2回目から北九州市との合同企画となり、地元の大学生チームも加わった。そして第3回目となる今回は、若手社員と協力会社、大学生、高校生、小学生、一般市民でチームを作り、合計7炉に発展した。次第にたたらが地域の人材育成へ広がりを見せている。

「地域と共存して繁栄していくことが製鉄所の役割の一つです。モノづくりの心を地域の方々とも共有していくことが大切だと考えています。また、実際に鉄に触れて身近に感じただきながら、製鉄所がどのように公害を克服し、環境問題に対応してきたかを地域の方々にも理解していただきたいと思えます」(八幡製鉄所長 古野英樹)

社員にとっても学ぶべき内容が増えた。

「社員にとって会社以外の方と共同作業することは大切なことです。特に小学生の皆さんに参加していただく上では安全管理が課題となるため、乗り越えるべき多くのハードルがありました。そうした障害を乗り越えて、社員が改めて安全確認の重要性を認識するなど、企画から実行までやり遂げる貴重な機会を得ることができたと思えます」(八幡製鉄所製鉄部長 三輪隆)



常務取締役
八幡製鉄所長
古野 英樹



八幡製鉄所
製鉄部長
三輪 隆



八幡製鉄所
生産業務部生産工程企画
グループ マネジャー
河野 捷紀



北九州環境プラントサービス㈱
代表取締役社長
櫻木 準一



「初めて小学生が参加することになり準備は大変でしたが、工場長会が中心となり、北九州市教育委員会、消防署、警察署、看護師の方々の協力もいただき、『東田たたら』は進化し続けていることを実感しました」(八幡製鉄所製鉄部製鉄技術グループマネジャー 具島昭)

「今回のプロジェクトでは自分自ら感動し、皆さんに感動を与えることができたのではないかと考えています。これからまず人をつくり、誠実にモノづくりに取り組み、素晴らしい成果をあげていきたいと心に誓いました」(八幡製鉄所製鉄部製鉄技術グループリーダー 栗原喜一郎)

北九州市 モノづくりの街として

近代製鉄誕生の地、北九州市。モノづくりの街として、蓄積された産業技術と先人の知恵や努力を伝え、モノづくりの遺伝子を未来に受け継ぐため、2006年、(仮称)北九州産業技術博物館が開館する。

「モノづくりは人づくりです。技術の保存継承だけではなく、地域全体での人材育成も一つのテーマにしています。今後も新日鉄とは連携を取り、広く市民に広げていきたいイベントです」と、北九州市企画政策室企画政策課主査の壽崎公明氏は語る。

「2年前に戸畑の第4高炉でたたら製鉄が行われた様子を見て、こんなに素晴らしいものはぜひ市民に公開していきたいと思っていました。それが昨年から現実となり、記念すべきこの東田第一高炉史跡広場で実施できたことを嬉しく思います」と、同市産業学術振興局産業振興部産学連携課主査の都甲猛氏も感慨深げに語る。

実は、この地は近代製鉄以前から鉄に縁があり、東田周辺は1400年ごろ“多々羅”という地名で呼ばれていたという。洞海湾で砂鉄が取れることから、黒崎(黒い砂鉄の御崎)という地名も残っている。今回中原小学校の子供たちは、授業の一環として、このたたら体験に備えて芦屋浜で原料の砂鉄を採取してきた。

「小・中・高・大学生が街の歴史を知り、誇りを持ってもらいたいと思います。今回のように学校だけではできない体験を通じてモノづくりの重要性を理解し、将来、モノづくりを担う人材に育って欲しいですね。世代を越えてモノづくりのプロと共に体験したことは、子供たちにとって一生忘れられないものになるでしょう。地域全体の技術として、北九州市らしい良い事例になりました」と、北九州市企画政策室主幹の吉森裕氏はその成果を語る。

モノづくりの現場と先生方の熱意が融合

このたたら体験学習については、教育関係者からも高い関心が寄せられている。

「これまで工場見学のような例は多くありますが、企業が実際のモノづくりの教育まで手がけるのは珍しく、先取型の取り組みで、このような具体的取り組みが望まれています。しか

もテーマは映画『もののけ姫』にも出てきた『たたら』で夢があります。新日鉄にはぜひこのような取り組みを継続してもらいたいと考えています」と、北九州市立教育センター指導主事の奥田淳一氏は語る。

そして、今回のプロジェクト成功の大きな要因は教育現場の姿勢だ。小学生の参加が実現した陰には、担任の先生を中心とする熱意があった。

「もともと社会科の工業生産の学習時に、地元を代表する企業で資源循環型の高い技術を持つ八幡製鉄所をテーマに取り上げ、子供たちに日本の工業生産が国民生活を支えていることを理解し、考えてもらいました。子供たちにとって鉄が身近になり、今回は社会科からさらに発展した総合学習として鉄づくりを体験することで、より身近になったのではないのでしょうか。自らモノを作り出す感動、実際に仕事をしている人と一緒に作業する体験は、通常の授業にはない総合学習ならではのものだと思います」と、中原小学校5年1組担任の高松淳子先生は語る。

企業の地域連携のモデルとして

環境教育は、単に「モノを大切に下さい」というだけでは伝わらない。一つひとつがどのように作られているかを目で見て実体験し、働く人と交流することによって「モノを大切にする」本質的な意味を実感できる。

モノづくりと環境を表裏一体で教育に取り入れることは、一見遠回りに見えても結果として近道になる。時間はかかるが、継続的な活動によって蒔かれた種が、子供たちが成長したときに大きな樹へと育つ。

「たたら熱いと、社員の皆さんの熱い熱意の2つの熱を感じました。心の中のたたらはこれからも炎を吐き続けます。グループで協力して作業することの大切さも学ぶことができましたし、見えないところでたくさんの方が準備や片づけをしてくださっていることも教えていきます」(高松先生)

モノづくりを通じて、他者を思いやる人づくりにも確実に貢献しているようだ。

また地域活性化の旗手として、新日鉄に対してさらに次のステージへの期待が高まっている。「技術のイノベーションや文化を市民が知り地域全体で支えていくことが大切です。今後は、こうした活動を継続しながら、(仮称)北九州産業技術博物館を主体に地域の異業種交流を活性化し、技術をトランスファーする場を提供したいと考えています。そして、若者たちに夢を与え、新たなモノを作り出す土壌を形成していきたいと思います」と、北九州市企画政策室長の片山憲一氏は地域の展望を語る。

最後に、古野は次のように語る。「製鉄所は農村漁村の犠牲の元に成り立った経緯があります。そのとき100年後の姿を描きながら地域と共存し繁栄してきました。今回地域の方々とモノづくりの心を共有することができました。社員も地域社会、世界に貢献するという意味で、人類に役立つモノを作り出す情熱を改めて感じることはできたのではないのでしょうか」



中原小学校5年1組
高松 淳子先生



北九州市企画政策室長
片山 憲一氏



北九州市企画政策室
企画政策課主査
壽崎 公明氏



北九州市産業学術振興局
産業振興部産学連携課
主査 都甲 猛氏



北九州市企画政策室
主幹
吉森 裕氏



北九州市立教育センター
指導主事
奥田 淳一氏



八幡製鉄所
製鉄部製鉄技術グループ
リーダー 栗原 喜一郎



八幡製鉄所
製鉄部製鉄技術グループ
マネジャー 具島 昭

前日

工場長・市民・戸畑工業の学生で、炭切り・原料配合・高校生たたら煙突製作そして小学生炉作業の安全最終確認

小学生にも安全に作業しやすいよう炉に上がる小さな階段が出来ている。「最後に帰りのバスの中で製鉄所の人たちが朝3時から寝ないで準備してくれたと聞き、ものすごく感謝しています」(熱血たたらチーム・実田君)

AM 7:00

当日の朝、7時に集合した、工場長・市民・戸畑工業の学生で炉製作を開始。炉床(床の部分)まで製作し、小学生を迎えた。

9:00

小学生到着
工場長、村下による安全教育

普段の八幡製鉄所との交流から子ども達の挨拶も自然と「ご安全に！」が定着。



神棚の『金屋子大神』に皆でたたら製鉄の成功を祈願。

9:30

炉製作から各班スタート

積み上げるたびに「よし！」と指差し確認。保護者も見守っている。「減多にできない体験で、最近八幡製鉄所の前を通るたびに覚えたことを教えてください」(5年1組のお母さん)。「私も中原小のOBで、鉄の街で育ってきたので高炉を見ると帰ってきた気持ちになります。子供たちも今日の体験を経て、大人になったときにそう思ってもらえれば」(5年2組のお母さん)

10:00

羽口の周りをモルタルで固めて、送風開始。
“ケラのベッド”となる炭を入れていく。

「木炭挿入のときは安全のための『足もとよし』やいろいろなかけ声をおしえてくださいました。けがをした人がいないのは、かけ声のおかげだと思います」(たたらーズ・山下君)。「声かけは、グループ内の人を気づかう事で協力・友情が生まれて、声出しは、声を出すことで周りが明るくなり、やる気、集中、元気がわいてきます。僕が一番印象に残ったことです」(たたらサーティーンズ・原田君)

11:40

原料の砂鉄装入

「少しずつ調節しながら計って、入れるときも手がふるえてゲームみたいでした」(たたらサーティーンズ・渡辺さん)。「交代でお昼ご飯を食べながら作業。暖を取るための炭火の中で作った焼き芋を子供たちに振舞う。途中、小雨が吹き込み冷える。「炉の中は1,000度以上と聞いてびっくりしました」(たたら挑戦グループ・池添君)



PM 13:30

初ノロ出し

「ノロ出しのとき、ノロが固まってたまっていくと、ノロ出し口の所に火がこないと聞いて驚きました」(たたらーズ・高嶋君)



13:45

最終砂鉄装入

高校生チームも顔を真っ黒にしながら取り組む。「砂鉄から作るのは初めてです。人がやっていると簡単に見えることも実際に自分たちでやると難しい。砂鉄を溶かして終わりかと思っていましたが不純物を取り除く作業などいろいろあることが分かりました」(1年生純情純鉄組・森君)。「北九州出身の生徒に故郷に誇りを持ってもらいたい。また機械科の生徒たちなので、機械を造る鉄について学べる良い機会です。この体験は一人ひとり印象も異なると思いますが、それぞれの進路検討に役立ててほしいですね。こうした専門分野は学校ではどうしても薄くなりますから、今回の新日鉄のような取り組みは他の企業にも広がってほしい」(戸畑工業高校機械科 後藤雅美先生)。「普段工業高校ではなかなかできない体験によって、どんな作業にも段取りがあることが分かったのではないのでしょうか。新日鉄が通常とは違うたたらに取り組むのは有意義なこと。これからも継続してもらいたいと思います」(戸畑工業高校機械科 伊藤学先生)



15:00

ケラ、ズク出し

すべての炉でケラ、ズクができ上がる。
参加者全員ケガなく無事終了。

「はじめは正直なところ心配しましたが、安全確認をしながらケガもなく成功したことは、とてもよかったと思います」(中原小学校5年2組担任 緒方美智恵先生)。「今までやって来た総合学習の中で一番たいへんできつかったけど、一番楽しくておもしろかったです」(たたら挑戦グループ・立山さん)。「ズクを出す時、入ってないかもしれない、失敗したかもしれないとちょっと不安になったけど、りっぱなズクができてよかったです。本当にありがとうございました」(たたら挑戦グループ・森君)。「ぼくの夢はプロのサッカー選手だけど、このたたら作りや鉄の勉強を通して、鉄を作る人もいいなと思いました」(熱血たたらグループ・佐藤君)。「ケラは少ししかなかったけど、村下の人たちやいろいろな人たちに支えられながらつくったケラだからぼくたちの宝物だと思います」(たたらサーティーンズ・友久君)。「みんなの努力の結晶がケラにつまっていると思います。昔のたたらはむずかしいけど、大人になったらぼくが復活させたいと思います」(たたらーズ・原口君)。「みんなで力をあわせてがんばって作らないといいものはいけません。『協力』を学びました」(熱血たたらグループ・上野さん)



	市民たたら					育成たたら			
	古代製鉄たたらーズ	未来へ持ち込んだたたら13ズ	熱血たたらグループ	たたら挑戦グループ	純情純鉄組	鉄翔	ケセラケラ	ケセラケラ	ケセラケラ
製造	ケラ	ケラ	ケラ	ズク	ケラ	ケラ	ズク	ケラ	ケラ
製造量	1kg	1kg	2.9kg	1.4kg	3.8kg	14kg	28kg	28kg	28kg
原料装入量	16kg	16kg	20kg	14kg	31kg	85kg	112kg	112kg	112kg
木炭装入量	48kg	50kg	54kg	57kg	66kg	254kg	195kg	195kg	195kg
学生・市民	中原小・市民				戸畑工業高・市民		北九大+九工大		
会社	新日鉄八幡工場長会					新日鉄および協力会社			

家庭での無駄を省き豊かで効率的な生活を



最近、省エネルギーに関する技術革新が進む産業部門よりも、民生部門における排出量の削減が課題となっている。そこで新日鉄は、技術・製品開発を通じた貢献だけでなく、社員それぞれの家庭でもCO₂排出量削減を推進するため、2003年に「わが家のCO₂」モニター調査を実施した。

個人が省エネルギー意識を

地球温暖化対策として、その有効な解決策と言われるCO₂削減。日本のCO₂排出量は年間約13億トンで、そのうち半分近くを占める産業部門は1990年代中頃から、自らの努力で着実にCO₂の排出量を削減してきた。新日鉄でも、自主行動計画を作成し、積極的に地球温暖化対策に取り組んでいる。

一方、残り半分を占める民生部門（約3.2億トン）と運輸部門（約2.6億トン）の排出量は、年々増加している。新日鉄は民生・運輸部門に対してもエコプロダクツの開発・提供により大きな貢献をしてきた。例えば、軽量かつ高強度の自動車鋼板を開発し、自動車メーカーの燃費向上努力をサポートし、また、電磁鋼板の性能向上などを通じて、家電メーカーによる省エネルギータイプの製品開発にひと役買っている。

しかし、もう一步踏み込んで、企業としてできることはまだあると環境部部長の岡崎照夫は指摘する。

「例えば、新日鉄には従業員が2万人以上います。家族を含めれば膨大なエネルギーを消費する集団です。そしてこの集団の集積こそが、民生・運輸部門の大きな要素です。したがって企業は社員とその家族に、省エネルギーやCO₂の

排出量削減に対する意識を高めてもらう努力をするべきだと思います」

新日鉄では、2003年に「わが家のCO₂」モニターを実施した。全国各地にある10製鉄所と本社から社員およびその家族を各10戸ずつ募り、家庭での消費エネルギーを1年間にわたり記録し、CO₂排出量に換算して集計した。

身近な家庭調査で、全社員の環境対策意識を高める

このモニター調査では、電気、都市ガス、LPガス、灯油（民生部門）について、各家庭の請求書と領収書に記載されている数字から消費量を月毎に拾い出して集計した。また、ガソリン（運輸部門）についても、モニター家庭の多くがマイカーを持っていることを考慮し、データに加えた。これらの合計が、その家庭の1カ月のエネルギー消費量であり、それを換算した数値がモニター家庭毎のCO₂排出量となる。

「わが家のCO₂排出量は、日本の家庭全般と比較してどの程度なのだろう」という関心が新日鉄の社員は非常に高いと、岡崎は言う。「産業部門の省エネルギーだけではなく、全社員が民生・運輸部門のCO₂抑制についても関心を深めて

「わが家のCO₂」モニター記入用紙

「わが家のCO₂」モニターからの感想

質問1. 「わが家のCO₂」に取り組む際に家庭で工夫したことなどを紹介してください。

- こまめに消灯するようになりました。(室蘭)
- 風呂の湯温設定を42 から41 に、湯量設定を180Lから120Lに変更しました。(室蘭)

真冬でもアイドリングストップを徹底しています。(室蘭)
使用しない電源系統はブレーカーをOFFにし、エアコンを使わない時はコンセントを外すなど待機電力削減に努めるようになりました。(君津)

毎月の結果を見て、風呂の残り水を使い洗濯の回数を減らしたり、こまめに消灯したりするようになりました。(八幡)

質問2. 「わが家のCO₂」への取り組みの成果について聞かせ下さい。

家庭内で省エネルギーに関する話題が増え、ライフスタイルを見直すきっかけとなりました。家庭では「省エネルギーで浮いたお金=エコマネー」の有効活用が話題となっています。(室蘭)

毎月の電気使用量(料金)の明細を確認し、前年実績より増えている時は原因について妻と話す機会が増えました。(室蘭)

家族全員が省エネルギーに気を配るようになりました。(室蘭)

電力料金は多く使うほど単価が上がること(累進課金)など、料金体系がわかりコスト意識が高まりました。(君津)

電気代の中で冷蔵庫の電気代が占める割合が高いこと、旧型冷蔵庫と最新型冷蔵庫では消費電力に雲泥の差があることが改めてわかり、冷蔵庫を買い換えました。(八幡)

ほしいと、このモニター調査を実施しました。一般的統計ではなく、同じ職場の身近な家庭がモニターになったこの調査は、全社的に高い関心を集めました」

2003年のモニター調査では、地域によるエネルギー消費量の差がわかった。例えば、室蘭製鉄所のモニター家庭では、他地域に比べて約2倍程度のエネルギーを消費している。ほぼ同じ緯度にあるヨーロッパ主要都市と同レベルだ。寒冷地は、暖房によるエネルギー消費がどうしても多くなるためであり、決して無駄遣いしているわけではない。

また、本社地区の家庭では、ガソリン消費量が地方に比べてきわめて低い。公共交通機関が発達している東京などの大都市では、地方に比べて自動車への依存度が低いため、通勤形態の違いが、数値にも表れた。公共の交通機関に関する抜本的対策をただちに講じることは難しいが、個人レベルで地道に取り組むことも重要だ。

「不採算路線のバスや電車を復活させると軽々しくは言えません。しかし、マイカーへの依存度を低くする有効策を、コストや利便さを天秤にかけながら個人で考えていく必要があるでしょう」(岡崎)

また、大家族ほど1人当たりのエネルギー消費量が少ないなど、ライフスタイルにも関わる興味深いデータも得られた。

地道な努力が重要 / 他企業、社会にも拡大を

環境部では2005年、第2回の「わが家のCO₂」モニター調査を実施する。今回は、各所(製鉄所および本社)のモニター家庭の数をそれぞれ1カ所30戸に拡大する予定だ。

2003年のモニター調査では、調査・統計方法を確認するとともに、新日鉄社員の家庭のエネルギー消費の実態を把握した結果、家庭でのエネルギー消費にはまだ無駄があることが判明した。それを削減していくことがこれからの課題だ。

「各家庭の無駄を省くだけで、2010年の民生部門のCO₂排出量を1990年レベルに抑えるという政府の目標数値に対して、大きく貢献できるはず。目標達成のためには、民生・運輸部門で現状の2割程度の削減が必要ですが、現在の豊かさを維持しながら実現できると考えています」(岡崎)

家電、自動車など耐久消費財の買い替えで省エネルギータイプの製品を選択する、こまめに電気を消す、あるいはエアコンの設定温度を抑えるなど無駄を省く努力をするだけで、家庭の消費エネルギーは相当量が抑えられる。

また、今回の調査では、モニター家庭で省エネルギーを実行するための具体的な仕掛けとして、待機電力の状態が一目でわかるコンセントを配布した。

「第2回ではさらに具体的な省エネルギーに取り組んでもらいたいと考えています。このコンセントをきっかけに、モニター家庭でさらに省エネルギーへの意識が高まればと思います」(岡崎)

岡崎は今後の展開について語る。

「新日鉄のグループ会社、さらには経団連の他企業とも連携してこのモニター調査を展開したいと考えています。展開を広げることでモニター数が増えれば、得られる情報が充実し、効果の高い省エネルギー対策のヒントも得られると思います」

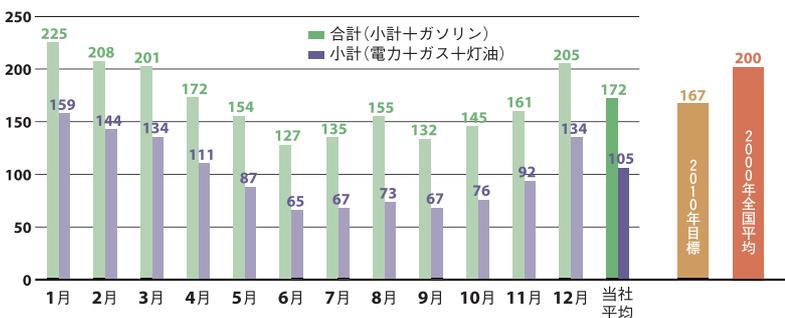
省エネルギー対策は、家庭の経済的負担を減らすことにもつながる。省エネルギーを実現する効率的な生活を送ることが「カッコいいライフスタイル」という価値観が定着すれば、豊かさを維持しながらCO₂排出量を抑えることも不可能ではない。



環境部 部長 岡崎 昭夫

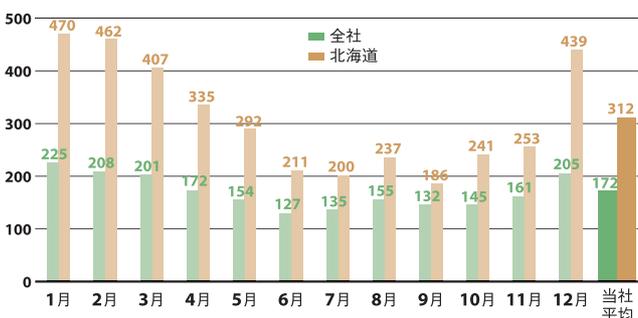
2003年 モニター平均CO₂排出量

(単位: kg-CO₂/人・月)



2003年 CO₂排出量のモニター平均と北海道比較

(単位: kg-CO₂/人・月)



社員1人当たりの年間CO₂排出量

直径10m位の風船
(年間のCO₂排出量)

1,000m³/年
(2.1t-CO₂)
172kg-CO₂/月



10万円/年
(=8,300円/月)

1人当たりの年間エネルギー料金

	月間消費量	CO ₂	月間費用
電気	134kWh	51kg	3,200円
都市ガス	11m ³	22kg	1,500円
LPガス	2m ³	5kg	300円
灯油	11リットル	27kg	400円
小計	—	105kg	5,400円
ガソリン	29リットル	67kg	2,900円
合計	—	172kg	8,300円

大切なのは楽曲、作品の原点から創造すること

今年で第15回目を迎えた「新日鉄音楽賞」。今年はフレッシュアーティスト賞をヴァイオリニストの植村理葉さん、特別賞は演出家の栗山昌良氏が受賞した。本企画では受賞者のお二人をお招きし、(財)新日鉄文化財団の千速晃理事長と、受賞の感想や活動への思い、企業メセナなどについて語り合っていた。



ゲスト /

ヴァイオリニスト **植村 理葉さん**



演出家

栗山 昌良氏



新日本製鉄(株)代表取締役会長

(財)新日鉄文化財団理事長 **千速 晃**

千速 新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。

植村 ありがとうございます。思いがけず受賞のお知らせを聞き、初めは大変驚きました。立派な選考委員の方々を選んでいただいて光栄です。今後もさらに責任感を持って、心を新たに活動していきたいと思っております。

栗山 新日鉄音楽賞は、第1回の松本美和子さんの時からほぼ毎年贈呈式に出席させていただいています。今までの受賞者の方々を良く存じ上げていますが、まさか僕が受賞するとは夢にも思いませんでした。ありがとうございました。

千速 植村さんはベルリン在住でヨーロッパでの公演が多いとお聞きしていますが、現在の活動内容はどのようなものですか。

植村 ソリストとしてオーケストラと共演する活動が中心です。現在はドイツでの公演が圧倒的に多く、年間15~17回になります。昨年は5都市でメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を演奏しました。日本では過去に、毎日ソリステンや名古屋フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会などに出演しました。昨年4月からは東京・立川で、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会(10曲、全4回)を始め、今年3月に第4回公演があります。今後、日本での活動も増やしていきたいと考えています。

千速 栗山さんは、半世紀にわたるご活動の中で膨大な数の作品を手がけていらっしゃると思います。近年のご活動はどのようなものですか。

栗山 僕の活動の最盛期は1970~80年代でした。演出は、演じられた瞬間に消えていく仕事ですから、“時代性”とも言うべき、その時代の社会のあり方に影響を受けます。僕の活動が時代に合うかどうかを考えていたときにこの賞をいただきましたので、ここまで見ていてくださるのなら、もう少し素直な気持ちで、今後もお誘いがあれば仕事をしようと思っています。

楽譜に嘘をつかない“誠実さ”が基本

千速 植村さんは授賞理由の中で、「ヴァイオリニストと呼ぶよりも、むしろ“音楽家”と呼ぶ方がふさわしい」と評価されていますが、演奏で心がけていることは何ですか。また、ドイツで活動されていて日本の音楽事情との違いを感じますか。

植村 音楽を解釈するには、楽曲が作られた当時まで遡って、何を意味していたかということを読み取ることが大切です。楽譜を読んで作曲家の背景を考え楽曲の原点に戻り、演奏する自分と照らし合わせて、完全に自分と一体化した時点で演奏することを心がけています。その表現がお客様に伝わって、一人ひとりの心で何かを感じ取っていただければうれしく思います。音楽事情の違いについては、国の援助が少ない日本では、演奏家もどれだけ集客できるかといった演奏以外のことで気を使う場面が多いように思います。またドイツでは、演奏家の知名度にかかわらず、皆さん生活の一部として気楽に音楽会へ行きます。

千速 栗山さんは、現在、奇をてらう現代的オペラ演出が花盛りの中で、1954年のデビュー以来、一貫して原作の持つ音楽性やドラマ性を大切にされ、正攻法とも言うべき舞台を作られてきましたね。

栗山 オペラは一言で言うと、“楽譜をいかに読み、それをどのように視覚化するか”です。さまざまな要素があり、その一つが欠けても成立しません。植村さんのお話にもありましたが、原点である楽譜を勝手に解釈しないということが基本ですね。オペラは一つの公演で、最低でも約200人のスタッフが動きます。表現に対する意識を共有化するためには、きちんと思いを伝えなければなりません。大切なことは“誠実さ”の一語に尽きます。“楽譜に嘘をつかない、ごまかさない”、つまり作品に対して誠実であることが重要です。



植村 理葉さん

プロフィール/うえむら・りよ

1971年生まれ。桐朋女子高校卒。全日本学生音楽コンクール小学校の部全国1位。日本音楽コンクール第2位。文化庁芸術家在外研修員(3年派遣)ローマ奨学金を受ける。ケルン音楽大学、ローザンヌ音楽院、ドレスデン音楽大学で研鑽。ミケランジェロ・アバド国際コンクール優勝。モーツァルト国際コンクール2位(最高位)モーツァルト特別賞受賞。ミュンヘン放送交響楽団、アウグスブルク・フィルなどドイツ各地のオーケストラと共演。滞欧15年、協奏曲のソリストとして成功を収める。国内では毎日ソリストに出演。東響、東京フィルなどと共演。今年にはストラヴィンスキーのヴァイオリン協奏曲をチューリッゲン・フィルと共演。国内では川口で新たにベートーヴェン・ソナタ全曲演奏会の2巡目を予定。シューマンのヴァイオリン協奏曲のCDをドイツ・ソニーからリリース。



1981年、鈴木共子教室バイオリン発表会にて。翌年学生音楽コンクール 小学校の部全国第1位



ドイツ・ケルン音楽大学留学の頃。ケルン市街を流れるライン川の川岸で祖父と



栗山 昌良氏

プロフィール/くりやま・まさよし

1926年生まれ。東京出身。劇団俳優座を経て、1954年、二期会オペラ「アマールと夜の訪問者」(メノッティ)でオペラ演出家としてデビュー。1969年、畑中良輔、若杉弘と東京室内歌劇場を結成。以来、代表的な名作オペラ、特に日本のオペラを数多く手がける。1972年文化庁在外研修員として留学。文化庁オペラ研修所所長、新国立劇場オペラ研修所講師などを歴任。昨年度は「椿姫」「蝶々夫人」「卒塔婆小町」(石桁眞礼生)「ヴォツェック」(ベルク)などの演出。2005年は「こうもり」「声」(ブーランク)「トゥーランドット」「コシ・ファン・トゥッテ」などを手がける。国立音楽大学名誉教授。これまでに1987年紫綬褒章、1996年勲四等旭日小綬章受章。



1987年、二期会オペラ カルメン 稽古場にて



2003年9月、二期会オペラ 蝶々夫人 写真提供:二期会オペラ振興会

企業の幅広く息の長い支援に期待

千速 当社では1995年、“発掘・創造・育成・交流の場”をテーマに「紀尾井ホール」をオープンし、その運営母体として「(財)新日鉄文化財団」を設立しました。洋楽ホール(800席)は室内楽ホールという位置付けが、邦楽ホール(250席)は日本初の邦楽専用ホールとして高く評価されています。交通の便が良く、緑豊かな場所を建設地に選んで良かったと思っています。

植村 企業が芸術を支援なさることは素晴らしいと思います。以前から、紀尾井ホールで一度演奏してみたいと思っていたので、今年7月の受賞記念コンサートで弾けることが今から楽しみです。また、「紀尾井シンフォニエッタ東京」は素晴らしいオーケストラですから、いつかメンデルスゾーンやベートーヴェンの協奏曲で共演させていただく機会ができれば幸せです。

栗山 それは楽しみです。紀尾井ホールは稼働率も非常に高く、邦楽ホールもあわせて本当にいいホールです。現在、オペラは盛んだと言われますが、以前、観賞団体の活動が盛んだった時代は上演回数が今よりはるかに多かったように思います。今の歌手さんは技術的にレベルアップしましたが、その力を発揮する場が少なくなっていますので、これからはもっと積極的支援があればと思っています。

千速 何かお役に立てる機会があればうれしく思います。最後に、今後のお仕事にける思いや抱負をお聞かせください。



植村 ヴァイオリンは私の生活の一部です。いや、それが全てかもしれません。人間的にさまざまな経験をして成長できる糧でもあります。やりがいのあることを自然な形で見つけられたことを幸せに思っています。約10年前に、共演していたオーケストラから依頼され、シューマンのヴァイオリン協奏曲のCDをリリースしました。最近2枚目についての問い合わせがあったときに「ありません」とお答えするのが申し訳なく、そろそろ制作したいと思っています。現在はCDで聴かれる方も大勢いらっしゃいますので、活動の一環としては是非実現させたいですね。

栗山 結果的にオペラは僕の一生です。20世紀の初めの頃、オペラは過去の芸術である、と言われていましたが、再び蘇った。そんな時代を走ってきた“20世紀人間”です。ですから未来と言っても... (笑) 現在お引き受けしている仕事を無事に終えるだけです。

千速 本日はありがとうございました。

三村社長、中国・北京を訪問

三村社長は1月26～28日、中国・北京を訪問し、中国における経済調整の進捗状況、今後の経済見通し、中国鉄鋼業界における環境対策への取り組み等について、中国の要人と幅広い意見交換を行

った。

*国有資産監督管理委員会：中国の国有企業改革および再編を指導、促進し、国有資産の価値の維持、増加を目標とする委員会。主任は、日本の大臣級の役職



1月27日北京釣魚台国賓館にて、国有資産監督管理委員会(*)李 榮融 主任と面談

新日鉄、カナダ原料炭シッパー(EVCP)と権益取得・新規長期契約について基本合意

新日鉄は、韓国POSCO社と共に、エルクバレー・コール・パートナーシップ(本社：カナダ・アルバータ州、社長：ジム・ポボウィッチ、以下「EVCP」と、カナダ・ブリティッシュコロンビア州南東部に位置するエルクビュー炭鉱の権益をそれぞれ2.5%取得し、同炭

鉱を共同で拡張することおよび拡張・増産されるエルクビュー炭を両社が引取ること、基本合意した。エルクビュー炭鉱は、現在、EVCP(テック・コミンコ社38%、フォーディング社62%で形成するパートナーシップ)により所有・運営され、560万トン/年体制で操

業しているが、当社およびPOSCO社の出資・参入により、2007年には700万トン/年体制となり、近年世界的に需給タイト化が進んでいる原料炭マーケットの安定化に資するものと期待される。

また、当社は、EVCPと2005年以降10年間、エルクビュー炭とフ

ォーディング炭を合わせ総量約2,900万トンの原料炭を購入することに関し、基本合意した。契約締結により、総量約600万トンのコークス用炭の増量引取りが確保できる。

新日鉄と株中山製鋼所による棒線製造新会社の設立、および新日鉄による株中山製鋼所の株式の取得

新日鉄と株中山製鋼所は、棒線圧延を行う製造会社を共同出資により設立することを基本合意し、併せて新日鉄による株中山製鋼所の株式の取得について合意した(出資比率：現行13% 5%)

1. 棒線圧延を行う製造新会社の設

立およびその目的

新日鉄と株中山製鋼所は、双方の棒線事業の競争力強化を目的に、共同出資(新日鉄60%、株中山製鋼40%)の新会社を設立する。新会社は、株中山製鋼所から棒線圧延設備を購入し、新日鉄および株中山製鋼所々々から圧延業

務を受託する、製造会社となる。これにより、新日鉄としては、西日本地区における納期・デリバリー面等の対応力の向上が図られ、株中山製鋼所では、圧延設備の稼働率が向上する。

2. 株式取得

新日鉄と株中山製鋼所とは、これまで、鋼片およびコークスの取引、鋼材生産の受委託、関連会社間の事業統合等の連携策を進めてきたが、今後とも連携をさらに深化し、双方でメリットを享受するために、株式の追加取得を行った。株中山製鋼所も新日鉄の株式を追加取得する。

住友金属工業(株)和歌山製鉄所の鉄源設備共同活用に関する検討の開始

新日鉄と住友金属工業(株)は、これまで双方のコスト競争力強化のため相互連携策を行ってきた。今回、中国・アジアの経済成長等に伴う国内外での旺盛な鋼材需要

に対し、両社の既存設備を一層効率的に活用し、供給力を確保・向上させるため、今般、新たに東アジア連合鋼鉄(株)(*)へ新日鉄が資本参加することを前提に、住友金

属工業(株)和歌山製鉄所の鉄源設備の共同活用について検討を開始することに合意した。なお、両社は、提携関係にある株神戸製鋼所との間においても、両社間の検討状況

を踏まえて、連携施策の拡大の可能性を検討していく。

*所在地：東京都中央区、社長：天谷雅俊、資本<平成17年4月以降>：303億円、株主：住友金属工業(株)62%、中国鋼鉄股分有限公司33%、住友商事(株)5%

PCB汚染土壌浄化実証試験の実施について

新日鉄、松下電器産業(株)、三菱重工業(株)、日鉄運輸(株)は、PCB汚染土壌の浄化についての実証試験を本年5月より約3カ月間にわたって実施

する。松下電器は、これまでPCB入り機器等の無害化処理およびPCB汚染土壌浄化の研究に取り組んできたが、

今回の実証試験で、さらなる処理の安全性や確実性、経済性等の検証を行う。具体的には松下グループが保管するPCB汚染土壌を日鉄運輸が輸

送し、新日鉄北九州環境技術センター内に設置する三菱重工業が開発した溶剤抽出法プラントで、小規模での実証試験を行う。

平成16年度「第1回LCA日本フォーラム表彰」功労賞を受賞

このたび、当社部長の高松信彦(HIISI/世界鉄鋼協会 技術・環境部長として出向中)が、平成16年度「第

1回LCA日本フォーラム表彰」の「功労賞」を受賞した。産業界での代表として日本におけるLCAの普及

と基盤構築に貢献したことが高く評価されたもの。鉄鋼業に初めてLCAの概念を取り込み、鉄鋼製品の優位

性を内外にアピールしてきた高松は、現在、世界鉄鋼協会でも世界規模での環境問題に取り組んでいる。

新日鉄コンサート

3月放送予定 毎週日曜日22:30～23:00 ニッポン放送

- 6日 ウィーン・リング・アンサンブル
NEW YEAR CONCERT
ツィラー：ワルツ『心地よい夜に』
 - 13・20日 プロミシング アーティストシリーズ#106
菊池洋子:ピアノ
 - 27日 ニッポン放送「新日鉄コンサート」公開録音 最終回
新日本フィルハーモニー交響楽団公演 指揮：井上道義
- 一部地域により、放送局・放送時間が異なる場合があります。

紀尾井ホール

3月主催・共催公演情報から

- 2日 日本の作曲・21世紀へのあゆみ第3期 第32回 合唱
曲目：高橋悠治「クリマトーガニ」、一柳慧「子供の十字軍」、池辺晋一郎「東洋民謡集」、三善晃「縄文土偶」
出演：田中伸昭(指揮)、中嶋香(Pf)、東京混声合唱団(合唱)
 - 5日 日本の作曲・21世紀へのあゆみ第3期 第33回 合唱
曲目：西村朗「ヘテロフォニー」、吉松隆「忘れっぽい天使」
湯浅譲二「クラリネット・ソリチュード」、三枝成彰「VIOLA '82」、松下功「時の糸」
出演：鈴木良昭(Cl)、甲斐史子(Vn・Va)、大須賀かおり(Pf)、カルテット・エクセルシオ
- お問い合わせ・チケットのお申し込み先：紀尾井ホールチケットセンター
TEL 03-3237-0061 受付10時～19時 日・祝休 <http://www.kioi-hall.or.jp>

高温成形用5000系アルミ合金が、日経優秀製品・サービス賞「最優秀賞」受賞

新日鉄と古河スカイ(株)が本田技研工業(株)と共同で開発したアルミニウム合金が、日経優秀製品・サービス賞の「最優秀賞」に輝いた。同製品はホンダレジェンドに採用されており、高い成形性を持つことから、従来アルミでは難しいとされてきたトランクの内板や車軸をのせるサブフレームに使用され、自動車車体軽量化に貢献する技術として評価された。

2月2日開催された表彰式で、

当社三村社長は日本経済新聞社杉田亮毅社長より表彰状を授与された。受賞パーティでは受賞企業を代表し、三村社長による乾杯の発声が行われ、「日本は今確実に回復してきているが、それは政府の力ではなく民間の力です。受賞した製品やサービスをみると、ひとつひとつが実に素晴らしい製品で感銘を受けました。企業に時代を読みとる感性が養われつつあるようです」とその喜びを述べた。



社長室での受賞関係者一同



乾杯の音頭をとる三村社長

中央合同庁舎第7号館整備等事業における建設工事の着工について

都市再生プロジェクト(1次決定)で、国内最大規模のPFI事業となる中央合同庁舎第7号館整備等事業の建設工事準備が整い、1月7日着工した。特別目的会社霞が

関7号館PFI(株)は、引き続き官民融合の街づくりの実現と、PFIの先導的プロジェクトの完遂を通じ、事業価値の最大化と社会利益の創出に取り組む。

官庁棟(地上33階地下2階) 官民棟(地上38階地下3階) 旧文部科学省庁舎の一部保存改修ならびに中央広場整備、2棟の総延床面積25万㎡、鉄骨造、最高高さ176m



新津田鋼材(株)および(株)三井物産コイルセンターの再編

新津田鋼材(株)は、今後の需要環境の変化に対応し、将来的な収益・財務基盤を強固なものとするため、以下の事業再編を進める。

1. 商社事業・薄板加工事業の分離、グループ資本構成の見直し

新津田鋼材のコイルセンター部門を分離して商社専業とし、新日鉄が

保有する株式(現持分比率40%)を全て三井物産(同60%)が取得して三井物産の完全子会社とする。さらに、新津田の商社機能と(株)三井物産コイルセンター(MCC)の薄板加工流通機能の連携強化のため、三井物産が保有するMCC株式(現持分比率64%)を全て新津田に譲渡

し、MCCを新津田鋼材の子会社とする。

2. 薄板加工事業の再編

新津田鋼材(株)の池田コイルセンターをMCCへ営業譲渡し、三井物産および新日鉄両グループの中核コイルセンターであるMCCを、東西3拠点体制とする。また、新日鉄

によるMCCへの出資比率の向上を検討する。新津田鋼材の筑波コイルセンターを閉鎖して加工機能をMCC群馬・横浜等へ移管、MCC全体での加工費・輸送費の適正化等を図る。

* 新津田鋼材(株)：津田鋼材(株)の営業譲受会社として平成10年9月に三井物産(株)および新日鉄が共同出資して設立。

平成16年度優秀省エネルギー機器表彰で会長賞受賞「バイオアタック・ダイエットシステム」

環境エンジニアリング(株)の「バイオアタック・ダイエットシステム」が、「平成16年度優秀省エネルギー機器表彰」の「会長賞」を受賞した。余剰汚泥の減容(従来比 80%)と

排水の高度処理を可能にし、省エネルギーと環境負荷低減に貢献したことが高く評価された。

お問い合わせ先
環境エンジニアリング(株)
TEL.03-3862-1611(代表)
<http://www.k-eng.co.jp/>

(社)日本機械工業連合会の金井会長より会長賞を授与される後藤社長



(株)日鉄電磁テクノ ISO14001認証取得・ホームページ開設

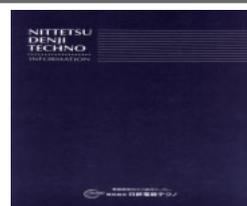
(株)日鉄電磁テクノは、平成16年12月24日、全社(本社・美和工場、佐織工場、関東工場)でISO14001の認証を取得した。電磁鋼板事業を中核とする同社は、エネルギーの効率活用等を通じて地域、地球環境の維持向上に貢献することを

環境理念に掲げている。また平成16年10月には会社案内パンフレットの全面改訂を行い、12月1日からはホームページを開設した。

お問い合わせ先 (株)日鉄電磁テクノ
管理部 TEL 052-444-8112
<http://www.denji-techno.co.jp/>



ホームページ



会社案内パンフレット

SPACE WORLD 通信



15周年記念イベント第1弾 劇場版ワンピース『オマツリ男爵と秘密の島』公開記念 ワンピース スペースワールドの冒険 3月5日~5月8日

スペースワールドはお陰さまでこの春15周年を迎えます。これを記念して、週刊少年ジャンプで連載を開始し、TVアニメーションでも大人気の海賊冒険漫画『ワンピース』の劇場公開記念スペシャルイベントを開催します!スペースドームの巨大な会場を海賊気分ですばらしく探検して進んでいくと、ルフィをはじめ人気キャラクターの展示やゲームなど色々な体験が楽しめます。関連グッズも多数ご用意。お子様から大人まで『ワンピース』の世界をたっぷりとお楽しみください!

お問い合わせ先
スペースワールド・インフォメーションセンター
TEL.093-672-3600
URL <http://www.spaceworld.co.jp/>

	大人(中学生~64歳)	小人(4歳~小学生)
フリーパス	3,800円	2,800円

0~3歳・65歳以上の方は無料



鉄づくりの不思議を、楽しく、わかりやすく。新日鉄から、絵本第4巻発刊。
いまごろになっている、「鋼 太郎衛門」も、絵本第4巻「鉄の未来の新・モノ語り」に登場しているキャラクターです。これまで「新・モノ語り」絵本シリーズは、製鉄所や展示会、学校や地域などで無料配布し、子どもたちをはじめ多くの方から反響をいただき、4巻合計で25万部を発行しました。第4巻では、鉄づくりの原点「たたら」から、最先端の製鉄技術、そして鉄づくりがもたらす未来の可能性までも冒険物語風にご紹介。子どもたちばかりでなく、大人の皆さんにも、ぜひ読んでいただきたい内容になっています。また、同時に新日鉄では「鉄と鉄鋼がわかる本」も発行されました。素晴らしい素材「鉄」をもっと身近に感じてほしい。そして、モノづくりの面白さ、楽しさに触れてほしい。そんな新日鉄の願いとメッセージを、いま、お贈りします。
<http://www.nsc.co.jp> お問い合わせは広報センター Tel.03-3275-5016

「鉄の未来の新・モノ語り」申込方法：1.二住所 2.お名前を葉書に記入して下記までお送りください。
〒100-8071 東京都千代田区大手町2-6-3 新日鉄広報センター「絵本文書係」
「鉄と鉄鋼がわかる本」新日本製鉄編者は、日本実業出版社から発行。全国の書店で買い求めいただけます。

文藝春秋 2月号掲載



日本中の遊休地で、新日鉄グループにしかできない大規模再開発があります。工場跡地や社宅跡地などの遊休社有地を、どう再生していくか、それはいまや、全国いたるところで共通の課題となっています。ところが、この分野の大規模再開発では、開発の専門的なノウハウに加え、地域住民や行政との長期にわたるネットワークなどが求められ、従来の不動産デベロッパーでは取り組むのが難しいのも事実です。(株)新日鉄都市開発は、20年以上前から社有地再生の分野に力をそそぎ、実績を重ねてきました。北九州・東田地区、豊の北花田地区、横浜・日吉地区や姫路・大津島原地区をはじめ、それぞれの地域の次世代を見据え、「中身」を大切に街づくりは、高い評価を得ています。日本全国の製鉄所がある地域で、長年街づくりに取り組んできた新日鉄グループだからこそできること。地域と一体となった進化した街づくり。そして、力強い「資産価値再生」は、私たちににおまかせください。
お問い合わせは(株)新日鉄都市開発 Tel.03-3276-8149 <http://www.nscp-net.com/>

新日鉄 <http://www.nsc.co.jp>

文藝春秋 3月号掲載

N I P P O N
S T E E L
M O N T H L Y

新日本製鐵株式会社
〒100-8071 東京都千代田区大手町2-6-3 TEL03-3242-4111
編集発行人 総務部広報センター所長 白須 達朗

企画・編集・デザイン・印刷 株式会社 日活アド・エイジェンシー

本誌掲載の写真および図版・記事の無断転載を禁じます。

MARCH
2005年2月28日発行

環境特集

「美しい惑星、
皆の地球を守るために」

新日本製鐵株代表取締役副社長 平尾 隆

地域でモノづくりと環境を考える
八幡「東田たたらProject」に
小学生が参加

家庭での無駄を省き
豊かで効率的な生活を

紀尾井ホールで会いましょう VOL.3
第15回 新日鉄音楽賞

大切なのは楽曲、
作品の原点から創造すること

Clipboard

表紙 鉄を巡る色系の旅・シリーズ
辻 けい(つじ・けい)

表紙の言葉

さまざまなことがあった一年だった。
春風のゆっくと吹く中で。
さまざまな表情の鉄。ひょいと結んでみる。
春の草摘みのように。鉄の音色。

春の水山なき國をながけり <無村>

 新日本製鐵株式会社

皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。

FAX:03-3275-5611

新日鉄に関する情報は、インターネットでもご覧いただけます。

<http://www.nsc.co.jp>

